

とえく緋衣玉ハリ剪春羅ふいるかづり寶相蛾眉ハ寶相花ハ
 薔薇の一種碧竹花一紅粉青蛾うるはしく粧カミ形一瑞香ハ
 名蛾眉花和名ツキ草迎春探春と衛士ふいと一傍ふ青柳一だり
 烈女ハごと一迎春探春と衛士ふいと一傍ふ青柳一だり
 たぢろ月ふむるいく眠たう柳三あふ一國よりうつた
 る孟宗俗名孟宗竹あふ一圍カあふ一其筍冬を玳瑁をかさ
 じりむる一孝子ふ刷らさるハ世ふつとつたふうたぬ
 一なり垣ご一浅野のうちふ母子ハコ父子コトコ草翁草あど咲
 らいたふ其草影ふ容鳥カガのつゆ呼聲もよ一と何ニ
 水仕ミヅシ女らメあ令法リョウホフあり山茶料つみはと鄙ヒナうさうふと指サシ
 一みどりよどちふ池水ニ楊花落マユうさうたささと形カ

附餘

ぬ

夏園

たと浴ユを鳥ト空カラねとおもいつと板戸イタド何ニさきバあハらハ
 さつ朝日アサヒさ一ニ出デくは一ぬニよろクく春ハあどリも夏ナツ儲タケあ
 さくうハ花ハの雪ユキもづかハくみえあハけり空カラさりハげハ形カく改頼
 の歌ウタ小庭コニワの面オモをまハじハかハとハかハぬハ夕ユフ月の光ツキノヒカリとよのつハ白ハク形カ
 立タ空カラさハりハびハあハくハもハちハるハ月ツキあハ月ツキの光ヒカリとよのつハ白ハク形カ
 らハもハふハはハふハらん花ハ欄カの前マエふあハさハきハれハ柱ハもハてハ管ハさハけハ東ヒガシ
 屋ヤのうハちハふハ胡コ床トを居スて游ユ觀カンれハまハうハけハとハなハしハ玉タマふハ蓋フタ一
 魏王ヱイオウの園ノもハかくハやハ河カらんハあハさハきハハハ庭ニワ木キの義ギ節セツある材サイあ
 身ミあハ猶ナホ證シ歌カあハまハどハこハにハ畧リョクとハうハつハろハはハぬハ朱シュ華カのハ蒼ソウは

く色なぬれ玉をつらぬ露や染けんつゆ草のいとさき花
 花色形れバやをらふうつるづい河ぢさなのうちけく花
 ばうをあさだ京あはのき水花色なり青葉のさくらら
 か楓香椎白檮あむとれ老葉杜葉の影いびく玉かゝその
 ふい鏡葉ハ神の供物ふ備いつふとれあ色いげふめつら
 め形り狭井河のづよやうつしけび佐草草ハ枝ことふ
 三枝をけし出てゆふとてはる幣の形ふ似し花なま
 ば酒樽ふさきとあといでぬり 三枝サイグサと訓もあれ
 結香なり俗名ミツタ
 水際ふいかつるまろきげ立ゆとせをふしさく澤ふ
 咲花のけいとよめはる名花とて今は志りかゝり園丁

附録

のいふ花勝見ハかつ藻とく田字草花事なり水葱てふ
 らけといふし一節食ふも河てたり其花をきぬふもせ
 し形り 水葱ハ今の
 ミツナキ也 時あきかきつむこの花もろととふ
 浪形あせれ水まさ雲の池づらふうつきふさほむむらさ
 花れ浮浪立とみえふけふ 為忠後百首顯廣浪かこの水ま
 さくとふかげくたてたちろふ
 の舟のあ岡べふして於木筆の 辛事一
 名木筆 空さし向たふハか
 花浪形あうつしも河いぬをさみぬりほし水影ふおとひ
 ふのめしふちの花淺澤水ふ行れたるよふうち雲雀の
 かひのうきしつむもかゝ心をきたる君子の花も貴ふ
 子使君うたまの種の茉莉花ハふほいとめてむと

第九條

たり緋扇ヒキのさび雀頂ヒナふ紅花百合一河ふいのかつら
 ひまほし蒲のつるだは蒲葉一浅みとり名蒲たふちをばあ
 ち凌霄ヒソカを喬木ふまつひ雲形名蒲き空の龍多とみんげに雄ウ
 けせ水鶏ヒナ花さく比厄子一名夜もそから水鶏ヒナたこくえ
 いはさるのつねよしと河うけん仙翁を嵯峨ウヒナふ尋花色仙翁
嵯峨仙翁寺より出かまびな清記ふたづぬま清少納言枕草子
ばら形おとハぬ空ふほとときを鳴いたるもほよむとふ
 のまうけあり猶尋ぬづねもそまねとちなりまた去
 年ささく久木ヒキ今さくいしづらふはまぎにをらんとよみ
 今れ人のいし秋アキふハ河らしかし夏の夜たあくふ

附餘

もおとた五月雨の軒は菖蒲ふさしそふ下野の志め
 の原のさしもくさたのがおといふ身をやくらんス機ロ桐
 小魚河り拒霜も日る小酔てげ木芙蓉一名拒くね竹ハ
 年ふむとたびぬいしかと五月十三日と五月サツキの雨ふ所垂シナヒ
 けせ軒のむせをむに露の音をのこし滴テキのきらぬを河
 らる金拂草一葵アオイハみしき英瓜ウリぶらき葵河り錦榆イナ莢カを
 錢をちらし榆莢一夜合ハばしめて交り玉笋よふを待て香
 くばし玉笋一名丹桂トウキョウと月桂香者月の空まよほふら
 む鳳仙オウセンいのでの地ふおちげんささど竟ふほし飛さりぬ
 鳳仙俗名飛去子訓て石榴ハかけろいの日れ光を玉ハり

決明頰トビは花散むらく木香一種のそめて架ふのがせて
 香霧散はあつ鶏頭一名ハ一名日ふむらいてくびを散たれ
 枇杷ハ金壺をつらめて甘露をたくハ一蕙を楚畹の芳散
 うつして幽趣をよそけ日にむら一葵向日河り葵向日月ふ志
 たのふ菱苳河で垣ご一ふたく蚊遣火散けふりも人の烟
 ふくくもらぬ園の夕暗夕暗ふ玉ふぬく河ふちの若紫散陰志
 げく蟬の羽衣染てげで四五月ふ俗名十ツセ水月ふとが
 鳴聲ハ苔をばらい石ふ志み入る暑さ散り根蔓天香木樹
俗名ハ今世ふ杜松とふんいひあけふいぬ一と散人ふ
スギきいふわ一あれむ治の木散本としてひむら立むら散

附録

との名をえたりむきいづは夏む一散むせびありハムセビ
たぐいまぐ形ぎ河れど一ケ十ギ名恭紀また撥撥つき一本
散蘭も河りむらくは並立立る榛杜杜仲はトのきつたのき呉菜
 莢莢散梢よそまふ蠶を何散よそがふ形一つらん木晚暗の
 あやあきふ螢火散ホタルかるげふとむまの一散もまよをわ

秋園

春とのゝわといをばてぎ秋の山づま霧散志づまふ
 もほさみ散ところおほく秋を散若づから秋の色をえて
 うまこのまみちてりみちい穂見月の水田の稻散おひる
 ふく雲野な一ける香節カフジのとた河るいけふとの一鷹が

第九條

祿のとふりくる比をかまつるにき形をふかく雁来
 ら河を花を草鶏冠くぐいねく猩々の血衣をむことく
 みえふけを河に垣ふまつアサカホ一系牽牛いふ花を云りハ花かぞ
 くはむのし似色もあり多薺てふこ花をねり満と朝
 顔の名取負てよのつおねるハむ形びよれどまろき
 のねのゆ色ふるハめつらかなり山上憶良がよみ朝
 顔を桔梗形りとおもいつきとあらハかハ新撰字鏡ハ小桔
と注ハりたるハ晝顔の日なハにハのハをハみハさハけるハあハをハれハふ
とやハたハふハ一時ハ水ハ流ハいでハとハ急ハみハさハけハたハ芙蓉ハもハ河ハりハ
水夕顔ハ露ハのハ光ハをハとハつハとハ熟ハもハ人ハ満ハどハとハせハぬハ志ハるハしハるハや
午時蓮出

附餘

黄ハ小ハくハ色ハなハるハにハゆハふハみハしハきハ鬼菜秋ハとハだハのハ花ハにハ水
 影ハくハれハかハとハ望ハ月ハはハねハりハゆハくハ池ハづハらハハハ園ハのハ鏡ハとハこハとハいハふ
 づハいハきハみハちハとハりハにハ葉ハなハどハもハ河ハらハをハれハつハまハがハふハふハく
 みハふハのハまハとハほハのハ初ハ招ハ花ハふハ萬ハ葉ハ集ハ卷ハ十ハ四ハのハ歌ハふハまハがハふハふハく
 形ハくハにハぞハ吾ハこハふハらハくハとハ西ハ行ハ山ハ家ハ集ハふハ若ハはハとハむハるハ満ハを
 不ハのハ小ハ貝ハむハろハふハとハてハ色ハにハ濱ハとハいハふハにハやハ河ハるハらハんハまハを
 ねハりハとハ清ハ水ハ濱ハ臣ハのハ考ハいハつハるハむハとハもハとハきハとハたハらハ形ハのハふハくハ東
 此ハ間ハもハねハくハ新ハ草ハのハねハをハいハみハふハたハらハうハ一ハにハはハくハ合ハ歡ハのハ花
 もハ志ハらハのハ形ハかハらハふハらハきハくハ色ハなハるハ秋ハかハさハくハけハでハ玉ハ簪ハにハ蒼
 はハ老ハがハあハしハらハ秋ハかハらハはハちハ一ハ葉ハ月ハ過ハ色ハどハはハくハどハ葉ハにハまハしハ
 とハえハきハねハるハふハこハのハてハかハしハとハにハ形ハをハたハてハりハ年ハ長ハ月ハのハ秋ハふ

河ふ香櫟ノミのほひいと高し梧桐キの葉と露ツ成むくくた
 もいてや霜ふもあはて心やそげふちどしきぬ山あしの
 ばもまじ志かり金銭イいゝでか夜おちぬ子午花一名金榴
 とみたきついえく裂鈴サクれ如く郁子ムは常葉の青かつらと
 ほこり珠璣タのときア朱實アをふれたり傳ついふいふ一
 近江國王濱フより年ことみこれ實成奉るとと延喜例貢式
内小御費郁子ムはらし世れ平の宮ふめてそえし菊と黄華とおも
 いしふ紀の吹上れたねこそと打よそ浪ふまがふる白
 妙ハげにめてししいあしつは秋ごとふのまゆきしかど
 今も千種のいろれむきいで、常世の花と形にけり白

附録

田タふみどりをしきたるも根白豊食シロ韭ク秋葱アキのふしことり
 樹ツのそぎほよりゆつく影れ河うくと海戸ウふか
 くやくとまじめてたくとゆ野ノぶふを虫の聲たえむを
 あいさぬるも掉鹿の聲をちあちと園ノゆり

冬園

夏めてし池の水ミ草シをいつ朽クて時雨ととふふりつきたふ
 黄葉モハあしたれ薄氷ウスふ凝コて秋のねとり成シ占シふけり寒さ
 水際ミは白鷺シのそぼち風ふ毳ニれ吹きたまき立るも水の底
 なる魚イふ想成ととめたるねらん枯荻カラの葉れさやくを人
 や訪来トヒと河カやほしれ嶺ミの河らしれ吹またく夏陰カふのき

第九條

隱家もあらはふ形世て十府のそが薦コモとふなから朝日間ニ
 形くさく入りたるふも冬あのみよした借廬カキふり神嘗カキ月小春ツキ
 此名をぞ負オビけきを山茶の花はきつゞき忍冬も黄キふ白金シロカネ
 の色は染青丹アヲニまさむつたもさぢ地綿紅カキ綿ニことさやくから
 はち此葉ハ練衣とぶめ鳥柏ぬ世で山枿カキふとバもろくち
 包けり長春月々紅は稻終イネ月ツキをも志らば開たり霜ふりほ
 せを安倍橘の色もをい非ヒ時ツキ此香菓カキかぐもくく雪ふり一
 てる山橋ハ珊瑚の寶をみどりにつくみ虎茨闌天もさくと
 形らど美人蕉カキ此粧カキをげふもさやびて照咲ぬ水仙ハ金盞
 銀臺カキを呈蠟梅サシガハを暗香カキふ雪を河らとい春を待梅カキ此操カキハ疾カキ

一附録

開カキとめて遠村トホ小野コノふみわふらん堂花ドウハナをおれお心をたも
 いこのむく時をいそきてみだれさく四季をゆくの花も
 まなとむまねく咲つたぐゆつりて弓弦ユヅル葉カキ弓張月カキの
 やどれるも花カキ此曆カキのしをりなり報歳カキのらふ花も報歳
蘭先カキとより来る報春カキ開をめたり

昔年唐山より楓樹を載来る今
 官園及い仙臺侯園中ふ盛茂をる此く藝戸百計をれど
 分植をることとをえど近時種藝小精形るとのばとめて
 分栽を文政九年官醫堀本好益氏一株を寄贈せらるる
 色寂蓬山園中ふ植るふ地に旺して盛茂せり夏秋の交カキ

第九條

小毬と結ぶ菟麻子ふ似て稍大ふるも何り其葉三尖霜
 に逢てとみぢしよけり即丹楓あり宋の袁聚楓窓小牘
 自序云日對窓西烏柏省念舊聞得數十事録之以備遺忘
 時晚秋蕭瑟喜丹葉殘霞來射几案録成輒呼酒落之名曰
 楓窓小牘あこよ烏柏の丹葉を楓と稱バ唐宋の比ふ丹
 楓といふも斯方小て黄葉紅葉といふがぶとく泛稱な
 るづ○寛政年ふ公高輪の別墅小園成むらかせ玉
 いしよ也以來花木の名稱當否臣繁ふ匡させ玉ふこと
 既ふ年何りけきを其名稱品物もみふ臣繁が胸中ふあ
 べ故ふ今胸中をけししてふれ記成つく終こと志あり

附餘

存真圖譜 第十條

公はやより名物を好む五穀菜蔬花草樹竹羽族毛群蟲豸
 鱗介各五彩濃淡を施し真を存し圖采せしむる事こゝに
 數十年をつゝ今皆全譜と稱りて庫ふ盈たり尚觀覽をふ
 べ玉つるものハ頓ふ画工ふ命を其和漢名稱を常ふ臣
 繁ふ命し玉ふ唐山れ俗名を琉球人歳貢者附してとき
 液質し荷蘭れ語ハ長崎れ譯者ふ便りし番人ふ質を圖譜
 名稱相備りて分部の牒帖ふ扱めしむ趙文俶あ着色本草
 と吾いよさざれど豈ふまふ踰こべん文俶が小傳ハ王
 たり成形志の原圖ハとき阮亭居易録ハ載り
 たり成形志の原圖ハとき阮亭居易録ハ載り

と形をのり琉球學士吳繼志の着色本草に唐山の俗名と
集録したる百花鳥譜ふ志るたる名稱ハ滿州語ふり
ふりねねほ

質問本草の因 第十一條

我邦昔本草之學蓋有取證於唐山蓋寬永年來嚴禁私交故
醫家特稽農皇之袞披葛仙之經又賴審言東壁之書或搜索
稗官野史自詡乎究通論說當否顧其種々辨名其條々縷
折趨於層會乖違者豈可謂無哉獨我附庸有琉球琉球歲貢
唐山則託干此當否可明真假可審及我侯創建藥園署乃
採草拊至閑花荒植真寫形色旁止記產地之陰陽高下與榮

附錄

初小五
とゆき
實八十三
年なり

枯之早晚又腊花葉貼訂一帖或別苞枝根子實每歲五六十
種或八九十種併納一函以命中山王王使歲貢者質問諸各
省府縣之碩儒鴻醫若誤鑒評者再三反之反之弗辨亦復致
其活本而質其疑如斯始終十二年矣二人同鑒評者乃取而
錄之且有名稱新奇者此雖一人亦敢不妨雖係俗名者亦然
矣加之便崎懇試清賈之口吻又記漂客之對問相符者既而
積年之瑣言詹語錯然盈麓竟乃使藥園生纂集而編殆十二
卷合裝為八卷題曰質問本草雖未壽梨棗我侯存濟生之心而
憂民之心深矣豈唯憂民而已矣哉此書一出則殆始解前古
之惑者亦不為少可謂其功躋矣苟以本草方術為業既久

於乎學憑蠡測識等管窺深自慙之今也奉仕 薩藩屢閱此
 書大闡疇昔之矇一洗舊習敝帚千金愉快躍然机上恍乎如
 身攀桐栢遭真人也然局事煩鑿猶且南州地暖水土不旺瘡
 醒首疾眼目眈々騰寫殊疲敢激燈花漫鈔采其正要但恨不
 遑全錄如咀華未啖其實矣然此鈔則足識其厓略耳今觀此
 書固非汲古鈎沈切磋之所為也正是在仕進之幸爾
 寬政九年丁巳首春二十五日 於府學南院 臣曾繁謹撰
 中山王令學士吳繼志掌歲貢者質問往復之事繼志在其
 間又自著質問着色本草十二卷
 和泉式部琵琶の縁起を考 第十二條

附餘

封内日向國諸縣郡高岡郷真金山法華岳寺小和泉式部
 奉納琵琶此縁起あり享和のはじめ 臣繁小命てこの
 縁起を正さしむ 繁これを閱する小式部正慶二年此寺
 にこもとつるよし 繁按る小和泉式部ハ越前守大江雅
 致の女也り藤原資高養ひて子となし藤原保昌小配を
 式部ハ

一條院の御宇長保元年ふはとりて入内
 白河院の御宇長保元年卒たりたり正慶ハ
 光嚴院ハ御宇なきハ長保と距こと二百餘年なりとハ雅
 致の女也式部小河らぬ事明なりおとふ小寺記小志る